ダンス界で話題独占の2人を現地取材

アクラム・カーン＋シディ・ラルビ・シェルカウイ『ゼロ度　zero degrees』

©Tristam Kenton

異なる文化や2人の相違が昇華した珠玉の作品

フォーサイスやピナ・バウシュ※1の次は誰か。
ダンス界で次世代※2探しがされる中、注目を集めているのが、
アクラム・カーンとシディ・ラルビ・シェルカウイだ。
共にソロのダンサーであり振付家としても活躍する2人が、
初めて共同制作をした作品『ゼロ度』がヨーロッパ各地で絶賛されている。
来年1月に彩の国さいたま芸術劇場で初来日公演をする2人を、
公演中だったフランス・リヨンで現地取材。創作の背景を語ってもらった。

取材・文：佐藤友紀

チケットはソールド・アウト。ヨーロッパで人気沸騰の『ゼロ度』

フランス・リヨンにあるメゾン・ド・ラ・ダンスと言えば、ロビーにモーリス・ベジャールが依頼して作らせた故ジョルジュ・ドンの彫刻が飾られ、首藤康之※3が初めてマシュー・ボーン※4版『白鳥の湖』の主役ザ・スワンを踊った、文字通りの“ダンスの館※5”。ここでロンドンのサドラーズ・ウェルズ※6、パリのテアトル・ド・ラ・ヴィルなどに続いてアクラム・カーンとシディ・ラルビ・シェルカウイの『ゼロ度』が上演されたのは、もう必然だったと言えるだろう。何しろこの2つのダンスの殿堂でも、普段は自分のカンパニーで活動している2人が共同制作したこの作品の人気は断トツで切符はソールド・アウト。今回のリヨン公演でもわざわざパリから観に来たという観客もいたくらいの人気なのだ。

舞台は三方を壁で囲まれた殺風景な箱で上手と下手に各々一体ずつ人間大の人形が置かれている。そこにシンプルなコスチュームに身を包んだアクラムとラルビが現れ、並んで床に腰をおろすと、上半身のジェスチャーと共にある物語を語り始める。それはアクラムがバングラデシュからインドへの旅の途中で経験したショッキングなエピソード。私たち日本人にとっては海外への手形というポジティブなイメージしかないパスポートが、例えばピナ・バウシュの名作『ネルケン（カーネーション）』でも「ナチの時代を思い出す」と、ユダヤの老婦人に言わせてしまったぐらい強烈な扱われ方をしていたように、自分自身の存在が否定されかねない恐怖をもたらすということを改めて感じさせる出来事だ。そして始まる2人のダンス。最初は、どこからともなく聞こえてくるエキゾチックな音楽と共に、さっきまでのジェスチャーの延長のようにさり気ない動きから私たち観客を不思議な世界に誘ううちに、アクラムの異常にキレのいい回転、そしてラルビの人形も真っ青の柔らかい四肢の動きと、コンテンポラリー・ダンスには珍しい超絶技巧が次々に舞台上で披露される。

そのうち、2人の踊りは「自分たちの身体から型どった」という人形をも巻き込み、「最初は自分たちが人形を操っているけれども、そのうちどっちがリードしているかわからない状態」にまで昇華していく。後方の壁に見えたものは薄い紗幕ということも判明。そこに2人のシルエットが映し出されてより大人数の踊りに見えるほか、バンドのメンバーが浮かび上がってライブ演奏であることもわかるという仕掛けだ。

異なる背景、異なるダンスの2人だから、個性が際立つ作品

「2人で作品を創ろうと考えた時、各々が持つ踊りのニュアンスのようなものを無理矢理統一するのはやめようと話し合ったんだ。むしろ一緒に動いてみればみるほど、踊りの個性が際立った。ならばそれを活かして作品に取り込んでいくべきだと思ってね」

アクラム、ラルビは口々に『ゼロ度』の創作過程を説明する。

「僕たちは、各々バングラデシュ系のイギリス人、モロッコ系のベルギー人というデュアル・カルチャーのバックグラウンドを持つ。と同時に、世代的には、MTV※7に大きな影響を受けた世代というのかな。MTVのあのスピード感、映像の作られ方が、ダンサーとしての自分、振り付けをする時に自分に何らかのヒントを与えているんだ。でも、お手軽な一過性文化の消耗という面ではなく、あくまでも表現形態の一部としてだよ（笑い）」（ラルビ談）

MTVもそうだが、語りと踊りで物語を直接語るという点で、ほかの地方のインド舞踊よりも「少し低く見られているかな」とアクラムが言うカタカリの要素の反映のさせ方も理想的で、生と死のあわいのようなものまで※8感じさせてくれた本作。ソロ、そして2人のデュエットの構成の仕方も、静と動の緩急のつけ方の巧みさも目を見張るばかりだ。

「僕は13歳でピーター・ブルックの※9『マハーバーラタ※10』に出ているんだけど、当時は理解できなかったピーターの死生観、ものの創り方など、今ジワジワッと効いているかもしれないな」というアクラムの言葉が実感できる舞台。

この後、シルヴィ・ギエム※11との共演が控えているアクラム、首藤康之に振付作品を提供する予定のラルビと、目下、時の人だ。

● 注訳

1.ウィリアム・フォーサイス…振付家。フランクフルト・バレエ団の芸術監督として、先鋭的な作品を次々発表。現在は自身のカンパニーを主宰。さらに研ぎ澄まされた実験的な作品で世界のトップを走る。

2.ピナ・バウシュ…振付家、ダンサー。ヴッパタール舞踊団の芸術監督として、演劇などの手法を取り入れた独自の表現様式を確立。詩的な作品は、ダンス界のみならず、各界のクリエイターに刺激を与え続けている。

3.モーリス・ベジャール…振付家。20世紀バレエ団の芸術監督として、原初的舞踊を思わせるエロティシズム溢れる数々の作品で、芸術・思想界に多大な影響を与える。現在は、ベジャール・バレエ・ローザンヌを主宰。

4.ジョルジュ・ドン…ベジャールの下で活躍した、両性具有の魅力を持つ伝説的男性ダンサー。特に彼のためにベジャールが振付した『ボレロ』は、生命の力強さが溢れる傑作。1992年没。

5.首藤康之…ダンサー。東京バレエ団のソリストとして活躍。ベジャール・バレエ・ローザンヌのツアーに参加するなど海外公演も多く、日本人として初めて、マシュー・ボーン作品にも参加。

6.マシュー・ボーン…振付家。アドベンチャー・イン・モーション・ピクチャーズを設立後、男性ダンサーが白鳥を踊り、独自のストーリーで展開する『白鳥の湖』などで世界的な人気を確立。現在はニュー・アドベンチャーズを主宰。

7.MTV…1981年にアメリカで始まった、音楽専門のケーブルTV。音だけでなく、プロモーション・ビデオなど音楽を映像で見せることとなり、'80～'90年代の世界各国の若者文化に絶対的な影響力を持っていた。

8.カタカリ…インドの四大古典舞踊のひとつ。神話等を題材に歌とダンスでストーリーを展開。そのダンスは呪術的で時に激しく感情を表現する。「カタ」は物語、「カリ」は舞踊を意味する。

9.ピーター・ブルック…演出家。パリのブッフ・ドゥ・ノール劇場を拠点に、国際演劇創造センターCICTを主宰。『テンペスト』『桜の園』など前衛的な作品を次々と発表し、演劇界をリードするカリスマ。

10.『マハーバーラタ』…古代インドの宗教や哲学、神学の集大成である叙事詩を元にした、ブルック演出の作品。日本でも1988年に公演があり、子供だったアクラムも出演している。

11.『シルヴィ・ギエム』…パリ・オペラ座バレエ団出身のダンサー。高い身体能力とカリスマ性を併せ持ち、バレエ界のトップに立ち続ける。現在は、ロイヤル・バレエ団のゲスト・プリンシパル。

● PROFILE

©Chris Van der Burght

アクラム・カーン　Akram Khan（右）
ロンドン生まれのバングラデシュ系イギリス人。西洋コンテンポラリー・ダンスとインドの古典舞踊様式「カタカリ」をユニークに融合させ、異文化を越境する表現活動を精力的に行っている。2000年に、自身のカンパニーを設立。2004年に発表した『ma』でサウス・バンク・ショー・アワードを受賞したほか、受賞多数。現在、ロンドンのサドラーズ・ウェルズ劇場のアソシエート・アーティストを務めている。

シディ・ラルビ・シェルカウイ　Sidi Larbi Cherkaoui（左）
アントワープ生まれのモロッコ系ベルギー人。コンテンポラリー・ダンスの訓練と平行して、ヒップホップやモダンジャズのグループともセッションを行う。1997年にアラン・プラテル・バレエ団（Les Ballets C.de la B.）に参加。2000年にLes Ballets C.de la B.に振り付けた『Rien de rien』で、数々の賞を受賞。2002年には『ダヴァン』を共同創作。以降も、『Foi』（2003）、『Tempus fugit』（2004）等、話題作を次々と発表している。

最注目のダンサー／振付家による奇跡のデュエット

アクラム・カーン＋シディ・ラルビ・シェルカウイ

『ゼロ度　zero degrees』

民族の伝統とヨーロッパの文化という二重の背景、不確実なアイデンティティーを背負った2人が、葛藤と協調を重ねて切り開く、新たなダンスの地平。超絶技巧に彩られ、詩的な美しさに貫かれた、ダンス界最大の話題作をお見逃しなく。

【日時】2007年1月12日（金）開演 19:30　13日（土）開演 16:00　14日（日）開演 16:00
【会場】彩の国さいたま芸術劇場 大ホール
【演目】『ゼロ度　zero degrees』　【振付・演出・出演】アクラム・カーン、シディ・ラルビ・シェルカウイ
【音楽】ニッティン・サウニー　【彫刻】アントニー・ゴームリー
【チケット（税込）】一般 S席5,000円　A席3,000円　学生 A席2,000円
メンバーズ S席4,500円　A席2,700円
【発売日】メンバーズ 10月21日（土）　一般 10月28日（土）

◆『主役の男が女である時』レビュー

「ダンサーの内面を表したいい舞台だった」―森山開次

©Arnold Groeschel

6月30日～7月2日に彩の国さいたま芸術劇場で行われた、ヤン・ファーブルの『主役の男が女である時』には、多くの観客が訪れ、評判となった。この舞台の魅力を、ダンサーで振付家でもある森山開次さんにうかがった。

取材・文：鴨澤章子

女性ダンサーがソロで踊る、というくらいの前知識しかなくて観に来たんです。自分でもソロで踊っているからわかるんですが、ソロを観客に飽きさせないで見せるのは大変なことです。が、この作品はいろいろな角度から人間を描いていましたね。ダンサーがコメディタッチでしゃべったり、逆にストイックに踊ったり。ヤン・ファーブルはまるで昆虫を観察するように、人間をちょっと外側から見ている感じがします。（ファーブルの孫であり、自身の美術作品にも昆虫を使ったものがあるなど）ヤンの経歴は見終わってから知ったのですが、なるほどと妙に納得できて面白かった。もし自分が彼に振付してもらうとしたら、どういうふうに昆虫扱いされたり、道具扱いされるのだろうかと興味を持ちました。

ダンサーもよかったですね。こういう作品はともすればクサい感じになってしまうものですが、彼女のいろいろな側面をヤンがすごく観察しているから、神聖な部分だけじゃなくて、いやな部分を含めて、人間を人間としてちゃんと描けている。裸で踊るシーンもですが、ここまでダンサーができるのは、振付家との間によほどの信頼関係があるはずで、それはうらやましいことです。裸になっても、女性の身体を下品なものではなく、上品なまま終わらせることができていますから。

僕自身、ダンサーなので、作品の内容より、ダンサーがどういうふうに見えるかに興味があるんです。ダンサーをどれだけ活かしているか、引き出しているか、ダンサーがどれだけ生き生きしているか。ダンサーの中身が見えてくる演出が好きです。その点でも、この作品はスン・イム・ハーというダンサーがよく見えてくる。彼女を称えたいですね。芸術とか道徳性とかはどうでもいい。ダンスは、そこに立っている人（ダンサー）と、どれだけ（観客が）共感できるのか、ということだと思います。『主役の男が女である時』で、彼女の身体と観客は対話をしていたと思う。観客が（裸の）恥ずかしさも含めて共感し、集中して観ていたいい舞台だった。（談）

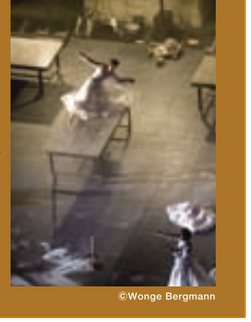
森山開次　Kaiji Moriyama
1973年神奈川県生まれ。21歳からダンスを始め、山崎広太・香瑠鼓らの国内・海外公演に出演する傍ら、ダンス公演・TVCFなど幅広いジャンルで振付を担当。2001年ソロ活動を開始し、『夕鶴』『弱法師』など和の素材を用いた独自の表現世界を確立。本年9月、ニューヨークで初演した『KATANA』の日本公演を好評のうちに終了し、来年2月にイタリア公演予定。

来年2月にヤン・ファーブルの次回作がやって来る！

ヤン・ファーブル　テキスト・舞台美術・振付

『わたしは血　JE SUIS SANG』～中世妖精物語～

人間の本質は、中世以来、変わっていない！「血」をテーマに描き出される人間の本性。ヤン・ファーブルが、美術家としての才能を遺憾なく発揮した舞台は、どのシーンをとっても絵画のように美しい。アヴィニョン演劇祭を震撼させた衝撃作品だ。


©Wonge Bergmann

【日時】2007年2月16日（金）開演 19:30
17日（土）開演 16:00　18日（日）開演 16:00
【会場】彩の国さいたま芸術劇場 大ホール
【演目】『わたしは血 JE SUIS SANG』～中世妖精物語～
【テキスト・舞台美術・振付】ヤン・ファーブル
【出演】俳優、ダンサー、ミュージシャン 23名
【チケット（税込）】
一般 S席7,000円　A席5,000円　学生 A席3,000円
メンバーズ S席6,300円　A席4,500円
【発売日】メンバーズ 11月25日（土）　一般 12月2日（土）